

---

# METAL GEAR SOLID RISING

ジェフティ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

METAL GEAR SOLID RISING

### 【Nコード】

N4304Z

### 【作者名】

ジェフティ

### 【あらすじ】

メタルギアソリッド2、ビッグ・シエル事件から数年後。S3計画の被験体として事件に巻き込まれた雷電はその後、愛国者達に拘束された。

度重なる人体実験の最中、彼に一人の女性が手を差し伸べる。

ビッグママ、かつてEVAと呼ばれた女性。

愛国者達により、全てを奪われた雷電は、オルガとの約束を果たすべく、再び戦地へと赴く。

METAL GEAR SOLIDの二次創作です。かなりのスロ  
ーペースになるかもしれません。

## Prolog(前書き)

メタルギアソリッド2、メタルギアソリッド4の内容が理解できているとより一層楽しめると思います。  
それでは、どごご。

## Prolog

少年は根っからの兵士だった。

彼のいる場所に漂うのは戦の香り。

ガンパウダーの香りが染み付いた衣服をまとい、血塗られた土の上を駆ける。

彼にはそれが何のためなのかは分からない。でも、そうしなければ自分は殺される。だから殺すのだ。

コピー品のカラシニコフのトリガーを引く。途端、眼前の男は頭から血を吹き出して倒れる。当然のことだが、彼にはそれが酷く面白く見えた。

そうして人を殺していく。ゲーム感覚で。

悲鳴が戦場に満ち溢れて、彼の耳に響いていく。それが何とも心地よかった。

目を覚ます。

乱している息を必死で整え、状況を整理する。

彼がいるのはベッドの上。薄いタオルケットを放り投げてベッドへと座る。

またこの夢か、と彼はうなだれる。

ジャック・ザ・リッパー、切り裂きジャックと呼ばれた少年は、雷電と名を変えた。それでもふとした時に過去の自分が現れる。

純真無垢だったが故に、殺しに何の嫌悪感も抱かなかった自分。それが怖かった。

今からまだ2年ほど前に起きたビッグ・シエル事件。そこで彼は、少年兵として彼を仕立て上げた張本人である男、ソリダス・スネークと再会した。そして、今まで忘れていた忌まわしき過去を思い出

したのだ。

ローズ・マリー……自身の恋人であり、良き理解者である彼女には、酷いことをしてしまつたと雷電は思った。そうして恐怖から逃げた結果がこれだ。

「被験体04、雷電を今すぐ連れてきなさい！」  
女の声。

その声は悲鳴と共に反響した。

「やめてくれ」「殺さないでくれ」「命だけは助けてくれ」  
そういった悲鳴の中、雷電は呼ばれる。

そうして彼は渋々、薄暗い部屋を出た。

光源の強いライトが、雷電の顔を照らす。雷電はそれに堪らず目を瞑つた。

「ふむ、やはり貴方が一番の出来ね」

白衣姿の女が言う。まるで挑発するかのように。

「お前は、俺をどうする気だ？」

雷電は問う。

「決まつてるわ、S3計画を再びやり直す。私はそのために愛国者達に入れられたんですもの」

雷電は黙って女の顔を見る。

隈が色濃く残つたその顔。そしてそれをむりやりに隠そうとしている化粧が逆効果を起こし、彼女を怪しく見せる。

彼女はストレンジプリファレンス。この薄汚い研究所で彼女はそう呼ばれている。

異常な趣味。その意味を持つ名前の通り、彼女は狂っている。現に雷電の体がそうだろう。

もはや人間とは呼べないその体。ロボットと呼んだ方がしっくりくるのではないか、などと思うほどだ。

狂気のマッドサイエンティスト、とは彼女のような人間の事を言う

のだろう。と雷電は半ば呆れながら彼女を見ていた。

「なに？その反抗的な目は？」

ストレンジプリファレンス、彼女は雷電の顎を持つと、それを持ち上げる。

「いや、なんでもない。それよりお得意の実験を始めたらどうだ？」

「そうね……そうしましょうか」

すると彼女は、工具箱のようなものを取り出す。ペンチにドライバー、ニッパーにドリル。もはや拷問とも言えよう。

「さて……はじめましょうか？」

彼女はニタリ、と笑みを浮かべ、舌なめずりをしてみせた。

体の節々が痛む。機械の体といえども、あちこちいじられればそれは痛いものだ。

雷電は愛国者達の傘下であるPMCの兵士に独房へ入れられると、窓から外を眺めた。とはいっても眺めるほどの大きさの窓ではない。そういえば、ローズと一緒に見た脱走映画では、こういった窓から脱出したり、穴を掘ったりして脱出していたな、と雷電は思い出す。しかし、この愛国者達の牢獄ではそうはいかない。ナノマシンによって完全に位置情報を把握され、センサー類が脱走者を感知する。雷電は、ローズ、そしてオルガに申し訳なく思った。ビッグ・シエル事件で子供を助けると約束したはずが、今ではどうしようもない。果てはローズに対しては、数多くの心配をさせた拳句、このように逃げ出した。

頭を抱えることしか無い。

”今の俺に何が出来るんだ？”

雷電は深く考え込んだ。

途端、彼は頬に熱気を感じた。思わず目をつむり、それから目を背ける。

「貴方が雷電？」

誰かが聞いた。

「アంతは……」

視界の先、雷電が振り向いた先からは光が差し込んでいた。そしてその光の中、ほこりが舞い散る中に女がいる。

「私がママ……ビッグママよ」

「ビッググ……ママ？」

雷電は首をかしげて言った。

その目線の先、派手な赤色の服、そして大胆にも胸元を露出している彼女は、そのてにスイッチのようなものを持っていた。おそらくC4か何かの起爆装置だと雷電は考える。

「そうよ、私は、対”愛国者達”レジスタンス、失樂園の戦士のリーダー。」

「その失樂園の戦士のリーダーがこの俺に何の用だ？」

「守って欲しいの」

「何を？」

雷電は顔をひきつらせ、そう問うた。

「ビッグボスの……遺体」

彼女がそう言った途端、銃声が鳴る。爆発騒ぎでPMCのパトロールが確認に来たのだ。それに対し、ビッグママは冷静にホルスターから銃を引きぬく。

年代物の銃だ。雷電は一瞬、モーゼルかと思ったが、少々形状が違ったことからコピー品だと理解した。

幼い頃から少年兵として育てられた彼女にとっては銃のコピー品も本物も大方見分けはつく。あのモーゼルも使ったような記憶があった。そうして彼女は、トリガーを引く。地面と水兵に向けられた手、銃を横にして撃つそのスタイルは”馬族撃ち”と呼ばれる。

マズルジャンプを最小限に抑えたムダの無い射撃。放たれた鉛はしっかりと兵士の頭へ着弾する。

「何をしているの？乗って！」

ビッグママが言う。雷電は言われるがまま彼女に先導に従った。

これまた年代物のバイクが一台、彼女の後ろに駐車してある。

「待ってくれ、アンタは何者なんだ。なんで俺を助けるんだ？」

「言ったはずよ、私は失樂園の戦士のリーダー。そしてあなたに力を貸してもらいたい」

雷電は、頭を掻く。すると後方から再び銃声が鳴り響き、雷電はその手を下ろした。

「貴方にも関係のあることよ、私達は愛国者達を……リキッドを止めなければならぬ」

「リキッド……」

雷電は、思わずその名を口走る。

リキッド・スネーク。

シャドーモセス島事件でフォックスハウンドを率いて決起を起こしたリーダー。そして彼は伝説の英雄、ソリッド・スネークによって殺害された。

いや、正しくは殺されていない。雷電は、ビッグ・シエル事件の際、アーセナルギアの甲板でリボルバー・オセロットの体を奪ったリキッドの姿を見ている。

「早くしなさい、行くわよ！」

雷電は、その声でハツとして、バイクにまたがる。するとビッグママはエンジンを吹かし始めた。

「おい、大丈夫なのか？」

雷電が問う。銃声はもうそこまで迫っているのだ。

「待って、まずこれを」

途端、ビッグママは注射器状のものを雷電の首筋へと突き刺す。

激痛が首から全身へと行き渡る。

「アンタ……何をして……」

「ナノマシンの抑制剤よ。被験体用の安いナノマシンなら、死滅させてしまうほどの威力のね」

首筋がズキズキと痛む。雷電は、患部を右手で押さえる。

「私がバイクを降りるのは、死ぬ時か……恋をした時か……」

彼女がそう呟く。雷電は何のことかと考えたが、その間もなく、バ

イクは勢い良く発進した。

それから数分間、雷電はビッグママの運転するバイクの後ろに乗っていた。

追っ手は簡単に振り切ることが出来た。雷電にはそれが畏なものではないかと疑ったが、それでも今は彼女そ信じるしか無かった。それ以外、愛国者達の施設から脱出する術などなかったのだから。

すると、信号待ちを食らう。

「チツ……」

彼女は舌打ちをすると貧乏ゆすりを始める。

それからややあつて、信号が変わるか変わらないかの瀬戸際、対向車線の車がこちらの車線へと移った。

真っ黒いバン。少々異質なその車はバイクに横付けすると、途端にパワーウィンドウを開ける。すると運転手が親指で後ろを指す。

「乗れ……ということか？」

雷電はビッグママに問うた。しかし彼女はそれに応えることなく、「遅かったわね」と怒り気味に言う。

そのままバイクはバンの後方へと走る。幸いなことに後ろに車はいない。

そういえば今は何時なのだろうか？雷電はふと思った。日が昇り始めているから早朝だということとはわかる。

バンの後ろがゆっくりと開いた。中はだいぶ広く、バイクは簡単に入る。

雷電はそのまま、バンの中へと乗る。

「待ってくれ、状況を教えてくれ」

雷電が言う。

「だから何度も言ってるでしょう？」

「そうじゃない、もっと……もっと詳しく教えてくれ」  
雷電がそう言つとどっしぐママは、ふう。と息を吐いた。

「愛国者達は、ナノマシンを使い、戦場を統治するシステムを創り上げた。Sons of patriotサンズ オフ パトリオット。それを手に入れるのがリキッドの狙い」

「待ってくれ、リキッドはそれをどうやって手に入れるつもりだ？」

「システムにアクセスすればいい。でも、それにはビッグボスの遺体が必要なの」

「なぜ？」

雷電が問う。

「……彼のDNAがシステムの鍵になっているの。だからリキッドはそれを欲しがっている」

なんてことだ。雷電はうなだれる。

SOPシステムについては、前々から雷電も話を聞いていた。戦場を完璧に統治するシステム。それによって戦争はPMC同士の代理戦争となった。

「それで、俺は彼の遺体を守れというのか？」

「ええ、それともう一つ」

ビッグママはそう言うレジスタンスの一員から何かを受け取る。写真のようなものだ。

「貴方には、私の息子も守ってほしい。私の……ビッグボスの息子を」

写真を雷電へと差し出す。その写真に映っていたのは白髪の老人……

「これは……！」

雷電は動揺する。

「まさか……アンタはこれが彼だというのか？」

「ええ、そのとおりよ。彼がソリッド・スネーク。伝説の英雄」

嘘だ。と雷電は思った。

彼がこんなに老けていると？冗談ではない。

雷電にとってソリッド・スネークは英雄であり、借りを返すべき相手だった。雷電はビッグ・シエル事件で、彼に何度も助けられたのだ。

「……交換条件がある」

恐る恐る、雷電は進言する。

「サニーを……助け出したい」

「サニー？」

ビッグママは頭にクエスチョンマークを浮かべる。

「そのサニーというのは？」

「オルガの……ゴルルコビッチの娘だ。俺はビッグ・シエル事件に時、彼女と約束した。サニーを必ず助けだすと」

雷電がそう言うと、ビッグママは口を抑えながら頷く。

「そうね……いいわよ。問題は、彼女がどこにいるか。ということ  
るだけ」

「……」

雷電は何も言い返せなかった。

こうは言ってみたもののサニーがどこにいるかなど分からないからだ。宛なんてどこにもない。

「どうすればいい……ローズ……」

彼女の名を口にする。

俺はまた、彼女に頼ろうとしているのか。いいのか、それで？

自分に言い聞かせる。

じゃあ、どうすればいいんだ？

そう考える内、まぶたが重くなった。必死に目を覚まそうとするも上がらない。

そうして雷電の目の前が暗闇となった。

覚醒する。

このような経験は何度目だろうか。  
愛国者達に捕らえられていた時もこのように突然意識を失うことがあった。

そうしたときはいつも必然的に例のマッドサイエンティストの下で縛り付けられていた。

しかし、今回は違う。

彼がいるのは教会だった。

教会の中、ポツンと置かれた診察台のようなベッドの上で寝ている。近くには様々な機械があり、それぞれが電子音を鳴らしている。

「……………」

雷電は黙って己の体を見た。

機械と化した体にコードが繋がられている。

雷電はそのコードをむりやりに引きぬく。すると、機械類が一気にエラー音をかき鳴らす。

「以外に早く目覚めたわね」

どこからか聞こえた声。思わず体を跳ねさせた雷電は、すぐさま声のする方を向く。

「なに？その怖い目？」

その声に聞き覚えがあった。嫌というほどに。

「お前は…………ストレンジプリファレンス……………」

なぜ彼女がここに？まさか嵌められたとでも言うのか？最悪の事態が脳裏をよぎる。

すると彼女と同じ方向から一人の女が現れる。

派手な赤を来た女。年不相応な奇抜な格好である。

「彼女は、マッドナー博士。私たちの味方よ」

「味方…………だと？」

雷電は、その答えを聞き、目を瞬いた。

話をまとめるところだった。

雷電の体に使用されている人工血液、ホワイトブラッドと呼称される旧型の人工血液は一定時間毎に透析を行わなければ自家中毒症状を引き起こす。

どうやらビッグママはその事を知っており、かねてからその技術を持った医者を探していたという。そこで出会ったのが皮肉にもストレンジプリファレンスこと、ドクターマッドナーだったというわけだ。

雷電はため息をついた。よりもよってなぜこの女なんだ、と。

彼女は、俗に言うマッドサイエンティストというヤツで、研究さえ出来ればどこだっていいというわけだ。愛国者達の下で実験を行なっていたのもそういう理由らしい。

彼女曰く、失樂園の戦士に就いた理由は”雷電ほど魅力的な研究材料はない”からだそうだ。それを聞いて雷電は飽き飽きしてしまった。

「さて、人工血液の透析は終わったようね  
ビッグママが言う。

「ああ、まだ体は痛むが特に支障は無い」  
「結構」

雷電にそう返した彼女は、壁に寄りかかった。

「貴方が助け出したっていうサニーっていう子供のことだけど、  
どうやら愛国者達の施設で”教育”を受けさせられているらしいわ。  
彼女が言うには、ね」

ビッグママが顎でマッドナー博士を指す。黒いBDUを着たレジスタンスの中、一人だけ白衣だったので彼女はすぐにどこか分かった。

「教育……というത്？」

「エリートの子育て、即ち洗脳みたいなもの。それが行われている施設がどうやらこの辺りにある」

ビッグママは人差し指で地面をさしながら言った。

「じゃあ……近くにいますか？」

「可能性はあるんですけど、まだ確定はしてないわ。それに、今の貴方にそんなことができるのかしら？」

雷電は、唇を強く噛んだ。彼女の言うとおりでからだ。

自分の無力さに落胆した雷電、彼は大人しく診察台に腰を下ろした。

それから何時間眠っただろうか。人工血液の透析は終わっていても愛国者達に捕らえられた時に出来た傷は未だに彼を蝕んでいた。

無理矢理にサイボーグ化された彼の体、まるで拒絶反応でも起こすかのように全身に痛みが発生する。

教会の奥、ローマ数字で表記された古めかしい振り子時計を見た。

時刻は既に九時を回っている。

右手を診察台に突き、体を無理矢理に押し上げる。すると何かが目に飛び込んだ。

細長いそれは、雷電を安堵させる。

高周波ブレードだ。ついでに言えばその隣にはソーコムピストルまで用意されている。ご丁寧にレーザーエイミングモジュールとサイレンサーまで付いている。

雷電はそれを手に取ると、高周波ブレードを腰に納め、ソーコムをレッグホルスターへとしまい込む。

きつと、ビッグママが用意したのだろう。雷電は、そう推察すると、レンガの壁に挟まれた小さなドアを見た。

どこにいるのだろうか。それはわからない。知る由もない。でも、今は行動したくて仕方がなかった。

耳元に手を当てる。ナノマシンによる体内無線はビッグ・シエル事件当時のままだ。愛国者達によって創りだされた大佐と、ローズの幻。あとは、ソリッド・スネーク……

頼れる存在は少なかった。でも、彼にはそれしか道は無かった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4304z/>

---

METAL GEAR SOLID RISING

2011年12月29日12時45分発行